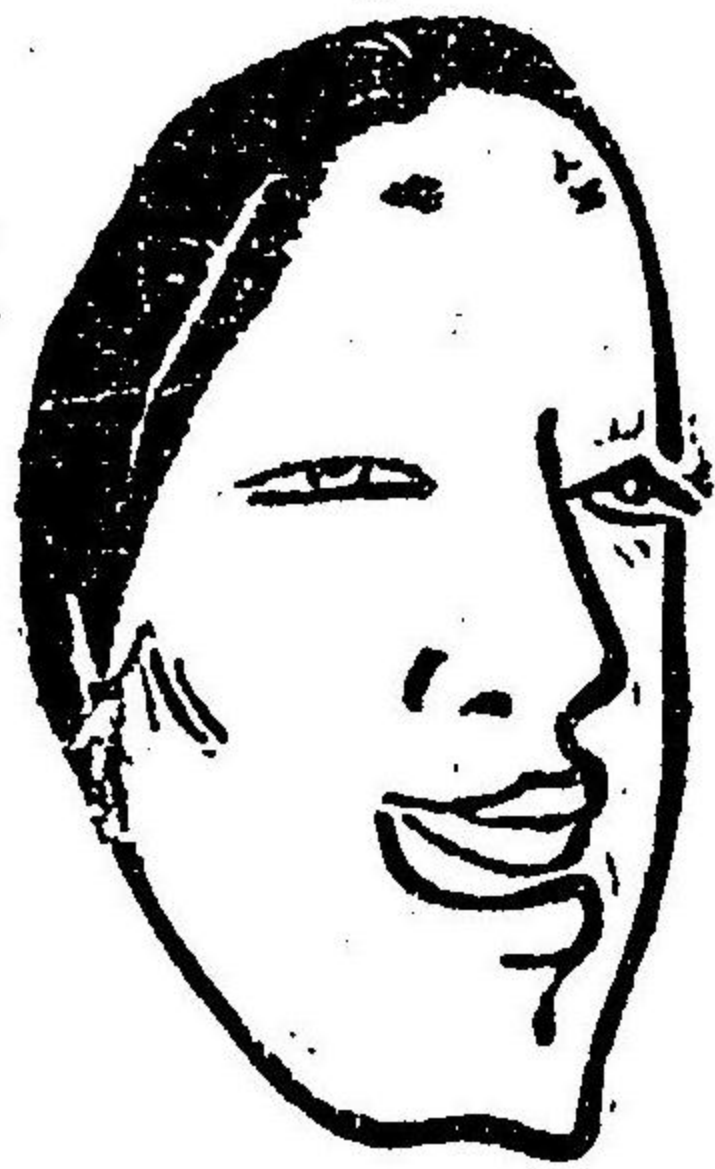


事さへもある。自分達の内生活の氣象も如何かすると這麼事だらけで、何も斯の旋風がたいして一日の氣象に影響したり、一生の生存に關係するといった程の事は無いにしても、それでも猶這麼小さな現象の底に、盲捜しに動いてゐる宇宙の極秘の或る閃きを見出す事が出来る。

日が少し曇り掛つて來たので、蒸暑さがまた堪へられなくなつた。俄かに渴きが湧いて咽喉が痙攣するやうになつた。西大寺村はつい其處に見える。私は痺れるやうな脚を引摺つてとぼくと歩いて往つた。



### 西大寺の伎藝天女

私は西大寺をたづねて、一わたり愛染堂の寶物を見終つた。

『寶物は既うこれでお終ひです』

と打切棒に言ひすてたまふ、年つ喰ひの、侏儒な西大寺の小僧は、先へ立つてさつと廊下へ出掛けて往つたが、ふとまた後歸りをして、

『あ、忘れとりました。此處に御居でやすのが、伎藝天女さんです』

とうす間い片隅に向き直つて、小生意氣に大人のやうにぐつと顎をしやくつて見せる。それは佛像だの位牌だの混雜と置き列べた間に、煤塗れになつた小ぼけな御厨子で、蝶番の脱れかゝつた隙間から窺いてみると、何やら得態の分らぬ佛鉢がつくねんと立つてゐる。屈み腰になつてじつと見入らうとするのを、衝立つた儘逡巡しさうに見てゐた小僧はさすがに氣の毒になつたかして、

『あ、一寸好い事がおすさかい』

と云つて、敏捷く香盤の側へ飛んで往つたかと思ふと、にこ／＼もので燐寸を弄ぐりながら歸つた来た。黙つて一本を摩ると、黄ろい光明がばつと附近に射した。

塗の剝れかゝつた扉の影を半身に受けながら、輪廓の明瞭した顔がくつきりと御厨子の暗に浮出して来た。切長の眼は心持伏目に、虚弱い火影の煽るに連れて、恠々した、如何やら少し羞耻むだ調子が見える。私はその容子が知人の誰やらに似たやうに思つて、まじ／＼と見入つてゐると、火は容捨なく段々と手元に燃え移つて来たかして、小僧は

『熱……………』

と仰山に叫んで、慌て、指につまむだ燃えさしを取り落したので、佛の顔は又もうす開い暗に鈍染み込んで了つた、……………

灯はまた點された。

『何卒こゝろもち下げて……………』

といふと小僧は面倒臭いといった風に、ぐいと手元に押下げる。

……………胸から腰へかけての肉附は、ふつ／＼として如何にも氣持がよい。名高い秋篠寺の夫とは異つて、これは定つた型のやうに左手に天華を捧げ、右手はすつと膝に垂れて、心持裾を紫けてゐる。柔かい衣の壁襖は、するりと腰を滑つて波のやうに脚元に流れてゐる。色彩の配合を見やうとして、煤ばんだ扉に額を押付けると、灯はまた消えかゝる。臆病な小僧は矢場に燃殻を振り捨て、しまつた。——うす開い暗に微臭い香氣が、微かに鼻に沁み込んで来る。

私が見たところでは、この佛には別に際立つてこれといふ程の秀れた技術も無ければ、人の心を蕩らすやうな空氣にも乏しい。が、それでも一度は人間の生活と技能の力の源泉となつた事もあつたのである。而し今となつては、其の力の凡はまたもとの人間自らに歸つて来て、人は既う嘲んだといつた風な、——さうで無くとも詰ないつた様な眼付をして、この佛達に對ふやうになつて来た。思ふに人間には永久に若からうとする心の傾向がある。偶像破壊はこれに伴ふ必然の努力で、私達の生活と

其の周圍とを通じて、どんな時にも、どんな處にも絶えず繰返されてゐる。してみれば私は道樂者の物好きな眼で、天女の姿を見入つた他に、最一度虐殺者の氣持をもつて、この惨な犠牲を見直さなければならぬ。——然うだ、さうで無くて何處に新人の觀察があらうと、私はまた後を振りかへつた。

『何卒最一度……』

小僧は不平面をして、口の内でぶつくさ呟きながら、暴に火を鑽つた。ぼつと明りが射すと、佛の姿は流星のやうに現はれて、聽てまたついと消えて了つた。先方から腹の中で少し熱くれてゐた此の年つ喰の悪戯者は、三度目の明りは磨るが早いかすつかり燃え切らない内に、さつさと投げ捨て、了つたので、燃殻の床にけし飛んだのを、憮とした顔付で、皮膚の硬つばしさうな踵でそつと踏み消してゐる。

死にかゝつた佛の御蔭で、那の侍儒な軀を養つてゐる西大寺の小僧は、飛んだ所で僥倖に御爲奉公をした譯で、第三の明りでは、私は何ともつかぬあやふやかな感じを得たに止まつた。が、しかし世の中は凡て恚うしたもので、蟬や蠶斯の死骸が滅多に



# 西大寺

私達の眼に見つからないやうに、神も佛も人知れずこつそり亡くなつてゐるので、お蔭で私達も氣持を悪くせずに濟むのかも知れない。して見れば私は二重にお慈悲を蒙つたやうな次第で………

私は歌つて寺を出て來た。

## 喜光寺

佐紀の村端れから郡山街道について南へ下ると、路の右手に當つて、熟れかゝつた  
 麥の穂並の上に、ぬつとした喜光寺の屋根が見える。

立ち止つて疲れたやうな屋根の勾配を見てゐると、これまでの旅にたいぞ覺えの無  
 い寂しい心持になつて来る、何うしたといふのであらう。——今朝奈良を發つて枚方  
 道を法華寺の附近で振返つて見た東大寺の眺めは、譬へ様も無い宏大なものだつた  
 が、今の心持は夫とも違ふ。いつやらはまた八條村の附近で正面に樂師寺の塔を振り  
 仰いでみた、それはすつきりと調子の整つたものだつたが、今の感は夫とも異ふ。先  
 づ一口に言つて了へば其塵歎の念に充ちたものでは無くて、寧ろ衰殘そのものに對  
 ひ合つた寂しいみじめな氣持だ。

私は砂埃のした草の上にとつかと腰をおろした。何方を向いても、若々しい生命に

充ちた初夏の光景のうちに、何處か悠々間の抜けたやうな、古い、大柄な屋根ののつ  
 そりと衝立つてゐるのを見ると、何といふ譯もなくいつぞや讀んだツルゲネエフの  
 『親と子』が不圖記憶に上つて来た。渠の親爺の名は何とやら言つた。確かニコライ、  
 ペトロキツチ、キルザノフ——あ、然うだ、家は段々と左前になつて来うとも、それ  
 は時の廻り合せだと絶念め、何ぞと言つては亡くなつた女房の事を考へ出し、唯もう  
 小兒のやうに他愛も無く戀しがつてみたり、さうかと思へば、バザロフの言つたやう  
 に四十四にもなつて、一家の主人が大絃琴でシウベルトの曲を弾いて試たりする渠の  
 ニコライ——何といふ事は無い、恚うして喜光寺の屋根を見てゐると、初めて那のニ  
 コライ親爺に馴染むだ折そつくりの氣持が湧いて来る……………  
 からりと晴れきつた空に、雲雀が一つ鳴いてゐる。滑かな歌は雫のやうに引切なし  
 に野に落ちて来る。朽ちて往く『時』の端々を取り逃すまいとするかのやうに、刹那  
 刹那に一杯の心持を吹き込むでゐるものと見える。ほんに雲雀といへば、何の世も現  
 實の誦ひ人で、その歌とまてはまた餘裕の無い心と、息も繼げぬ急調とに充ちてゐる。

……いつであつたか渠のニコライ親爺が弟のバベルに向つて、恚う言つてこぼした事がある。

「私達は既う時代に後れてゐる、息子といへばずつと先へ往き過ぎて了つて、如何やら御互ひに了解し兼ねるやうになつた。……何日だつたか私が母と口舌をした時に、母が随分と口喧ましく意地を張通されたもんだから、私もつい口を滑らして「貴方が御解りにならぬのも御無理はありません、二人は悉皆時代が違ふんですもの」と言つた事があつた。すると母は大層機嫌を損はれた容子だつたが、而し私は思つた「薬は苦いにして、母はそれを飲まなければならぬのだ」と。所がさ、這度は愈此方等に御鉢が廻つて来たといふものだ。若い奴等は言ふ「貴君方は現代の御方では無い、さつさと御薬を召し上りませい」とさ。」

恚う言つた所は、如何やら那の册抜のした喜光寺が言ひさうな口前らしい。ニコライ親爺に恚うした愚痴をこぼしたのは、那のバザロンと言つた虚無主義者の新人であつた。ここでは應て、それにも劣らぬ愛想氣の無い「時」の流であらう。ニコライ

が息子の言前に依ると、虚無主義は批評的見地から一切のものを視、什麼な權威にもへこたれぬものださうだが、「時」ほど批評的であり、「時」ほど權威を顧みぬものが世に二つとあらうか。其のこつ酷い「時」の手に小突かれて、甚く氣が減入つて、跼々になつてゐる那の喜光寺の屋根を見ると、しみじみと時代の嘆きといふものが味へる。ニコライ親爺といつたら、如何かすると亡くなつた女房を思ひ出して、樂しかつた戀の追懐に耽つてゐたといふが、那の老耄の喜光寺に其慶意氣がかつた夢があらうとは受取れぬ。五月末の日は、じわじわと炒るやうに照りつける。其の下で眩るしさうに、肩を露出しに乾ききつた古寺の容子はまるで、長い生活の重荷にへとへとに倦み疲れて、何處にでも腰を下すが早いか、既うこくりこくりと居睡を仕始める老耄爺の心持そつくりだ……



## 唐招提寺

唐招提寺の境内に入ると、こんもりとした樹立の若葉から銀のやうな風が爽かに落ちて来る。初夏の風ほど氣持の善いものは無い。何だか憇う人の善ささうに、向うから笑ひこけて掛るやうな、胸を開張けてでも居らうものなら、窃と滑り込むで、いきなり操りにかかるやうな氣輕さが見える。

寶塔の崩れかかつたのを間に挟んで、校倉建の寶藏と經藏とが、瘡せこけた脛を露出しに尻を端折つた老人のやうに見すばらしく衝立つてゐる。それを左に見て、禮堂の勾欄についてぐるりと右へ廻ると鼓樓へ出る。二間四方に足るか足らぬかといつた程の小體な建物で、所刻のした丹の色は燻しをかけたやうに黒ずんで、扉は悉皆蟲が入つてゐる。瓦は今にもすれ落ちさうで、憇うなると建築といつても眞に感然なもので、其の持前の落ちついた健やかな表情は無くなつて了つて、衰殘とか荒廢とかいつ

たやうな感じが、鼻と胸に應へる。

講堂は今普請最中で、金槌やら手斧の音が附近の木立に響いて、喧ましく耳に應へる。舍利殿の横手にある寺務所の前に立つて案内を頼むと、がらんとした堂内に誰一人受答をする者が無い。じつと奥を透し込むと剎ちよろけの襖の陰に晝寝でもしてゐるかして、瘡せこけた空脛が二本によきりと露出に見えてゐる。少し聲高に頼まうといふと、脛はむくむくと動き出して、怖ろしく頬の削けた、跛者の役僧が睡さうな眼を磨りながら、ひよつくりと起き上つて来た。金堂の拜觀を頼むと、何卒此方へと言つて、片片に磨り減つた朴齒の日和下駄を引掛に、ひよくりくと先へ立つて薄暗い庫裏の方へと案内をする。

私は寺院の建物では本堂に次いで庫裏が好きだ。構はず明け擴げてがらんとした附近の容子から、柱だの天井だのの黒光りに煤ばんだ工合、廣い板敷の夏も冷やりとする踏心地からして何と無く胸が透くやうだ。が、此寺のは天井といつても、よく田舎路の旅宿などで見る竹の簀子で、それに餘り低目に張つてあるのでつい頭が叩へる

うで、一體の調子が如何も少しこせついで感じられる。一寸した棚に何年か持ち古し  
たらしい鐵鉢が載かつて居り、上り框のつい右手に片寄せて、脚の缺けた經机が据え  
てある。今し方から頻りに戸口を出入してゐた燕の一つが、ひよいと其の片隅に止つ  
て、仔細らしい顔付で、しげしげと私の容子に見入つてゐる。

『お待せ申しました、御案内致します』

と、締釘の脱れかゝつた板敷をがたびしと踏み鳴らしながら、役僧は腰衣の儘で出  
て來た。黙つてその後に蹤いて出ると、近道だからといつて、竹の木戸を推開けて講  
堂の普請場を通りぬけにかゝる。太い梁だの削りさした桁だの混雜に置いてあるなか  
を、足の悪い役僧が飛ぶやうに拾ひ歩きをして往くと、何處やらで悪戯好きの人足が、  
『聲に取るなら跛者さんを取りやれ、歩きや躍るやうで面白い。』

と當擦りに黄ろい尖つた聲で調弄ひ初める。するとわつと言つて皆が嘩し出す。役  
僧はしよぼけた眼で、臆病さうに睨み返しながら、復讐一つ仕かねる身を、吾と嘲け  
るやうにへへへと冷たさうに笑つてゐる。

金堂の裏戸はぎいと軋りながら緩く開いた。一足踏み込むと、地の底から出るやう  
な、冷たい微臭い大氣がぶんと胸に沁み入つて來る。役僧はいそいそと堂を廻つて、  
大きな本尊の前に衝立ちながら、厭に嘔れた聲で講釋を初める。

『本尊は盧遮那佛、御身の長が八尺、脇土は千手觀音に藥師如來——何方も乾漆やさ  
うで、籠の心に十三枚の布を張つて、漆と抹香とで塗るのやさうです。本尊の胎内  
には過去未來の二千佛と光背に一千佛着いておいでやして……』  
と終ひには言語を落して、獨り言のやうに言つて退ける。私は眼をあげてじつと其  
邊を見まはした。

が、此寺の觀物は佛像の夫よりも、寧ろ堂の建築其物で、がつしりとした輪廓の大  
きさから、圓柱のぬつと衝立つてゐる心持は、言はう様も無い安靜なもので、柱から  
天井にかけて天人と草花とをべた一面に描いた極彩色の跡が、夢のやうに柔らかな囁  
言を與へる。

ホイスマンは其の傑作『大伽藍』の一篇で、デウタンといつた修道者をして、ゴチ

ツク式の大寺院に基督教の微妙な象徴を讀ませた。穹窿式のゴチック建築が基督教の象徴であるならば、構架式の東方寺院は或る意味で佛教の標象とも見られやう。この薄暗い、大氣の冷え切つた内陣は、取りも直さず法空涅槃の三昧境で、どつしりと衝立つてゐる大圓柱は、邪見の地面を離れて無上の圓寂に入る入正道のそれぞれであらう。卷斗方斗の斗の組物は教旨の論理的精確で、三門はいふ迄も無く空、無相、無作の三解脱門に相違ない。ほんにルゾオンが言つたやうに、尖塔の無邊際に聳えた西洋の建築に、惨ましい人間界を超脱しやうとする希望空想の垂直に高翔する悲劇的表象を讀む事が出来るならば、此寺の金堂では、一切の煩惱を自家胸裏に解脱し去つて、自性の寂靜に入る常住安泰の表象を見る事を得る。

が、それでゐて、私達のやうな一切の羈絆より逃れて、自家の覺醒に歸らうとする者には、此の金堂の内陣もどうやら餘りに空寂に過ぎる。重くしひ大きな屋根は其の垂直に働く重力を以て、私達の胸に堪へ難い壓迫を覺えしめる。私は何んだか息の詰まるやうな苦さを感じて、急に五月空の新しい空氣が心ゆくまで吸つてみたくなつ

た。振り仰いで見ると、盧遮那佛は落ち入つたやうな顔付で、寂然として控へてゐる。ひつそりと沈み切つた附近の大氣を通して、講堂普請の若い人足共が晴やかな木遣の節が夢のやうに傳はつて来る。慙うして怖しい大自然の破壊に面と向合つて、強て自家を争はうとする人間の營みが、悲壯なやうで如何やら徒事のやうにも想はれて来る

不意に肩のあたりで、草臥れたやうな掠れた聲がする。ついつつかりと忘れてゐたが、役僧は先方から塗の剥げた柱に凭りかかつて、所在なさに顛髻を扱いてゐたらしい。遠慮ない眼付で、空と私を見上げて

『本堂の拜觀は是で既うお終ひです。御歸りは何卒こちらから……』  
と敏捷く先へ立つて、正面の樞戸を開けにかかる、戸はざいと鈍く軋みながら欠伸をするやうに開いた。押出されるやうに外へ出ると、其處はがらんとした土壇で、八本の大圓柱がつつしりと衝立つてゐる。つい今し方より少し被さつて来た空合は、倒頭しよぼしよほと降り出しては居たが、外の大氣は肌觸が如何にも甘さうで、甦つた



やうに氣持がすがすがしくなる。若葉の風が一雜さつと吹き落して來ると、油のやうな雨が横に頻吹いて、白い土壇にじめくと滲み徹る。櫓の寶鐙が吐息をするやうにからりと鳴つた。

私は若葉の匂を一杯に胸に吸ひ込むで、徐々と石段を降りかかると、堂の裏手で役僧の櫓を落とす音が、重くごとりと響いた。



唐招提寺木兔引

五月も既う末になりかかつてゐた。其邊の畑では大麥の穂がすつかり出揃つて、夏初めの日影に銀のやうに白く光つてゐた。

私はその日の九時頃に奈良を經つて、秋篠の方へ廻つた。それから引回して西大寺を素通りに唐招提寺の裏門に入りかからうとしたのは、既う彼是一時過であつた。草臥れた脚を引摺つて、冬青垣に添うてとぼとぼ歩いて往くと、前方から佝僂のやうに腰の屈まつた爺さんがひよつくりと出て來た。右の手に撞木杖をついて、左には古びた鳥籠を提げてゐる。籠には小柄な木兔がゐて、爺さんの歩くのに連れて籠が揺れる度に、くるりと眼を睜いで吃驚したやうな顔をしてゐる。私は何かの本で確か日アキムと言つた聖母マリアの父親が、一人娘の精進にといつて、克明な顔付をして番鳩の籠を提げてゐるのを見た事があつたが、今爺の姿を見て何といふ事なく夫を思

ひ出した。

そぼろな形装で、何年か持古したらしい折目の摩り切れた小倉帯を瘠せこけた腰の上へちよこなんと結むでゐる。顔の削けた、色艶の悪い顔で、何處かに狐のやうに物に怯えて恟々した鬨子が見える。私は物好の心からつい試に呼びかけてみた。

『おい爺さん』

爺さんは何處を風が吹くかといつた風に、素知らぬ顔でとほとほと往きかけた。私は爺め、いきなり爺さんと呼びかけられたのを妙に癪に障へたに違ひない、見かけによらぬ氣位の高い奴だと思つて、誰だつたか京都とか奈良とかいつたやうな舊い都へ往くと、裏店の頼れかかつた家に燻つてる皺くちや爺なぞに、よく何某の後裔といつたやうな氏目の正しい輩がある。こんなのにひよつくり出會していけぞんざいな口調で道でも訊かうものなら、素知らぬ風に黙つて通り過ぎられる位はまだしもの事、意地くねの悪いのに會ふと、飛んだ方角違を教へられて、知らぬ土地でまごづくやうな愛目を見せられるといつた事を思ひ出して成程と頷いた。で、今度は幾らか丁寧な

口風で訊いてみた。

『もしもしお爺さん……………』

爺さんはひよいと立ち止つた。ちよつびり撮むだやうな鼻先をびくびくさせて、一わたり嗅ぐやうに私の姿を見まはした。そして別に何をいふでもなく空呆けた顔で衝立つてゐた。木兎はまた耳を引立てたまま睡むさうな眼を一杯に睜つてけろりとしてゐる。

『お爺さん、木兎ですかい其は。』

何だか一寸接穂がないので、わざと笑顔をしながら解りきつた事を訊ねると、爺さんは眼脂の浮いた土龍のやうな細い眼を妙にしよほしよほさせながら、恰で稅務署の小役人にも出會して、仕拂残りの租稅をでもつつかれるやうに、何だか甚く氣遣はしさうな容子で、やつとこなたと撞木杖を片手に持ち添へて、肌理の粗い、逆臚だつた指先をじつと耳根へ持つて往つた。

爺さんは雙なんだ。

私はすっかり老爺との應對を絶念めてしまつて、その儘別れて往かうとはしたが、何だかまだ残り惜しいやうな氣がして、つい後がへりをして爺さんの耳根へ顔を持つて往つた。

『あの、この鳥ね……………』

鳥籠を指さしながら圖外れな調子で恚う言ひ出してはみたもの、何だか自分の物好きが甚く下らなく思はれたので、それなり口を噤いでしまつた。それに汗臭い爺さんの肌の匂が無氣味に嘔吐さうにもあつたので……………。

『はあ、何やと思ふたらこれかいな、これお貴方木兎どつせ』

と爺さんは漸と安心したやうに、ぐつと唾を呑み込むでせいせい息を逸ませながら、京訛りの調子で早口に喋り出した。前齒がすつかり脱け落ちてゐる故か、息が洩れて甚く言語のあや分りが悪いが、その談話の節々を綴くり合せて聞いてみると、何でも今日正午過から木兎の餌をとりかたがた、招提寺の境内に小鳥を笑はせにやつて來は來たが、寺は生僧と講堂の普請最中なので甚く取込むで、金槌だの手斧などの音が

騒々しく、小鳥は一向に寄り集つて來ない、それに頭巾を着せた木兎の容子が妙に戯けて可笑しいといつて、悪戯好きの大工などが矢鏢にちよつかいを出すので、すつかり當が外れて陸方なしに今歸りかかつてるのださうだ。

『頭巾ちふの、これどつせ貴方はん』

と爺さんはにこにこもので懷中から緋羅紗の冠みたやうな物を取出して、指先にすつぱり被せかけてみせた。

『こないにして木兎に被せときよりますとな、種々な小鳥が笑ひに來ますさかい、其處をそれ能う鳥籠でお捕りやしたりしますが、私なぞほんの見て楽しむだけの事だすえ、蔭でな貴方。……………そないな殺生な事出來よりますかいな、この齡してて。』と爺さんは強て快活な物の言ひ振をして、大切さうに頭巾を懷中に藏ひ込みにかかつた。木兎は耳を引立てたまま、午過ぎの白い日影を瞬しさに凝と眼を細めながら、何處の誰とも解りやうはない旅の男を捕へて、惹けた飼主のやくたいもない長談話をうるさいといつたやうな顔付をしてゐる。

爺さんは悪容さうな眼色をして、うそうそと私の顔を見つめてゐたが、たわいもなく涙の落ちかかるのを慌てて皮膚の弛むだ手の甲に擦り上げた。そして

「檀那はん、お鳥目恵つてお呉りやはんか、木兔に」

と恟々もので言つて退けて、吾とわが嘲けるやうに唇元を曲めてゐる。

私は鋭くその顔を見かへした。爺は慌てて眼を逸らして外方を見た。

「餌でも買つてやらうとお言ひなの、木兔に」

「さうとす、木兔めまだお晝喰べよりまへんのだつせ貴方はん。」

と老爺は既うてもなく私も圓め込むやうに思つて、へへへと軽く追従かるやうに笑つた。

笑つた。

私は黙つて附近を見まはした。冬青の垣根に毛茸が一面に咲き續いてゐる。嬌々し

た其の下葉が一寸動いたと思ふと、素裸のやうな赤蛙が一つひよくりと、頭を擡げた。

私はそつと掌面で押へた。そしていきなり夫を鳥籠に衝込むと、木兔は吃驚したやう

に眼を睜つて軽く身構へをした。それでも直ぐ頭を伸して一寸嘴で受けたかと思ふと、

ぐつと既う一息に飲み込むでしまつた。

「さ、これで宜いだらう。」

私が平氣な顔をして恚ういふと、爺さんは不平面をして何かぶつぶつ呟きながら、

暴に鳥籠を揺ぶつて、すたすたとまた歩き出した。機を食つて木兔はよろよろと蹠蹠

けかかつたが、直ぐもう立て直してけろりと濟ましてゐた。

その日の五時過だつたか、私は途の都合で郡山へは出ないで、薬師寺からまた後へ引回して来た。俣が菅原の村外れを通りかかると、一文菓子だの、尻腐れのした夏蜜柑だのを並べた掘立小屋のやうな家の店先に、古びた鳥籠が懸つて先刻の木兔がちよこなんと止つてゐた。私は俣の上から屈み腰になつて、家内を覗き込むでゐると、老爺は轉寝をしてゐらしく、破けた屏風の蔭から干葡萄のやうに萎びた顔が見えてゐた。その瞬間私は先刻の仕打を餘りよくなかつたやうに思つて後悔した。俣はがらからとまた田圃路に出た、私はもう他の事を考へてゐた。

焙爐の香

細かい油のやうな雨は肅々と降つてゐる。私は唐招提寺を出て南へ薬師寺をさして急いで來ると、どうやら途を取違へたかして、鍵の手に折れる筈の小路は、つい前方で往き止つて了つて、罌粟の花の咲きこぼれた何家かの背戸口へ入り込んで來た。押壓されたやうな草家で、煤ばんだ助枝窓から烟が一條、また雨かといつた風に、物臭さうに這ひ出してゐる。今更後返りをする譯にも往かず、そこらを逡巡してゐると、股れかかつた裏口の腰障子が手荒く開いて、胡麻白頭こまじらの袖無を着た血の氣の薄うすい婆さんがひよいと顔を出した。

「薬師寺へは如何往きますませうか」

と心持會釋こころもちをしながら道を聞き訊すと、婆さんは胡散臭こまぢらさうに、まじまじと私の顔を見詰ながら、漸と納得が往つたやうに、

「其の垣を御跨ぎやして、畔枕あしざしをすつと右へお往きやすと本通へ出られます。あ、途をお取違へやしたさうな」

と誰やら家の者に應答して、氣の無ささうに灰色がかつた空合を一寸振り仰いで見て、またがたびしと腰障子を閉て切つて了つた。

教へられたやうに莢豆の實りきつた畔傳あしづたひに、黄ろい灰汁がかつた雨垂の落ちる楯下を、磨々に衝切つて了ふと、其が薬師寺の裏門へ通じる眞直な本通で、土が乾き切つてゐた故か、雨は然り氣なく吸ひ取られて、素脚で歩いたなら、蹠あしづらが生暖さうに思はれる。

何處やらにふんと焙爐の香がする。

此頃によいのは新茶の匂で、わけて悠うした旅の途すがらで其の香を嗅ぐと、何とも言はう様の無い心持がする。

マアテリングが言つたやうに、何日かは人の嗅覺も雪とか、氷とか、朝露とか、曙とか、星の瞬とか、月明りとか、細流とか、行く雲とか、又は空の微笑とかいつた

やうなもの香氣をも嗅ぎ分け得るやうになるかも知れぬが、私達の今の嗅覺の力では其塵事はとても追付かかねるとして、それでゐて私達は或る香氣を嗅いだ場合に、想像の助を借りて此等の自然界の極秘を、微かながらに味ひ得る。それが時には偶然に基いた聯想の作用であるにしても、今の所では嗅覺自らのみでは嗅ぎ難い自然の香氣と見て差支無からうと思ふ。それがまた各自に違つた聯想で違つた感味を得た所で、その人自らが其の瞬間に得た欺かざる印象であれば、其處に拒み難い眞實がある。私が焙爐の匂を嗅いで得た感は何といつたら宜からうか、——然やうさ、先づ眼に見えぬ物に對する憧憬の心地とでも言つたやうなところで——焦げるやうな焙爐の香に、這塵事を思ひ續けながら、自分ば雨の中を藥師寺の裏門へと入つて往つた。

### 吉祥天女

私は今藥師寺から出て來た。

路の衝あたりに一寸した祠がある。つい其邊まで見送つて來た小僧に聞いてみると、今迄の可憐しさとは打つて變つて、打切棒に、

「鎮守八幡さんだす」

と捨聲辭のやうに言ひ残して、小走りにさつさと寺務所の方へと引揚げて了つた。鎮守八幡といへば聞覚えがある、たしか此頃まで那の名高い吉祥天の畫が藏はれてあつた、其の祠に相違あるまい。

初めて那の繪を見たのは、去年であつたか京都博物館の特別陳列室を訪ねて往つた折であつた。水も垂るやうな其のしとやかな姿は永く藥師寺の寶藏に傳へられてあつたのを、いづの頃とも知れず、粗忽者の坊さんが飛んだ勘違ひをして神功皇后とでも

見損なつたものか、休息が岡の此の鎮守八幡に移し嗣られてあつた。それをつい先年になつて創めて發見したのださうで。——二尺にも足らぬ小幅で、布地も大分持ち弱つたらしく、繪具もあちこちに所刻がしかかつてゐる。定つた型のやうに左手に如意寶珠を持ち、右手に施無畏の印を結び、ふつくりとした顔立を心持傾けて、じつと物に見惚れた夢心地は、輪廓を象つた線の柔かさ、衣の深紫、褶の淺緑の華麗な色合と相適つて、言はう様も無い暖かな蕩らすやうな感を與へる。

那の繪を見て思つたのは、色と線との限りない柔かな音調で、女性が有つてゐる性の耽溺は、その縹縹たる諸音に遺憾なく歌はれてゐる。あの顔立の天女の氣高さといふよりも、何處までも人間の美しさで、それもつい其邊で途の通り合せに見られもするやうな親しみを見るにつけて、誰であつたか衣から褶の色合に、天平頃の服制の面影を認めて、或はさる女王あたりの肖像に憑つたものではあるまいかといつた疑問の、必ずしも根底の無いものでもないといふ事が思はれる。私が此の繪を見たとき、ふと思ひ浮べたのは、同じ時代の傑作として今に傳へられてゐる法華寺の本尊十一面觀音

で、言ひ傳へによると、光明皇后の御姿を模型にとつて彫んだものだといふ。那を見て得る感じは、靜かな、落ち付いた彫刻術の力で、女性の一面に潜れてゐる性の解脱は、その手法の比ひ無い沈靜に依つて、申分なく現はれてゐる。この二つを比べてみると、觀世音には典雅があり、吉祥天には婉美がある。彼は黄金の沈黙で、此は黄金の囁言である。前のに永遠の女性が仄めいてゐるとすれば、後には現實の女性が漂うてゐると見られる。此の二つを天平時代に興つた造形藝術の二方面の優れた代表的作物と見る事が出来るなら、やがてまた女性の性格に横はる解脱と耽溺との両面ににおける標象と見て差支はあるまい。

吉祥天の畫は何處の誰が描きあげたものか、今となつてこれを詮索める事は出来なからうが、而し何と言つても人生に酔つたものの手に出來た事だけは誰の目にも解る。人生に酔ふ——この態度は天平の藝術家の擅にしたところで、刻々に自家の新しい姿に目醒めてゆく現代の人には、この酔ふといふ態度は、遂に要めて得難い夢となつてゐる丈に、幾らか嫉ましといつた程の親しみを以て、私達の目に映るので

はあるまいか。私は靡げな初戀の夢を辿るやうな心持で、吉祥天の畫像を思ひ浮べながら、暫くは草の中に衝立つて、やくたいたもない恁麼事をも思つてゐた。

### 奈良の女乞食

奈良へ往つた折の事だ。

戒壇院から紀寺へ出やうとして、名も知らぬ狭苦しい町を、真直に南へ通りがよつた事があつた。丁座神嘗祭も過ぎた頃で、板廂のぶよ〜になつた汚くるしい店先に、尻腐のした果物やら、開き切つた蓋の厭に赤ちやけた濕地茸やらがちよつぱりと盛揚られた塙末の八百屋だの、厚ぼつたい安羅紗の外套とか、襟垢の除れ切れぬ、剝げちよろけの細い縮物の袷衣とかい寒さうに吊り下げられた古着屋などの不揃に立ち續いてゐる町の様子を見かへりながら、小石の凸凹した通をすた〜と歩いて往つた先下りになつた道が不意に鍵の手に折れて、坂れかゝつた築土に添うてくるりと右

へ周ると、一寸した新道の、縹細な出格子の附いた、たやらしい家の前へ出た、何氣なく其の門口まで來かかつて、私は思はず立ち止つた。

そこには女乞食がゐた、門口の鋪石にべたりと腰を下して、まだ眞新しい門の柱に凭りかゝつたままで寝てゐる。油氣の無い胡麻白の髪はばら〜に首筋に解けかゝり、水脹のした黄膽病のやうな顔は、ぐたりと横倒しに肩に凭れかゝつて、唇の瘰癧る度に白い齒が際立つて氣味悪く眼につく……が、それよりも奇異に堪へぬのは、ぶく〜のおん檻樓の上へ、手銅だの、柄杓だの、鼻緒の切れた足駄やら、鐵葉の空鐘やら、世帯道具一式残らず繩からげの儘括し附けてゐる事で、——世界中の有ゆる大きな勳章を、廣い胸一杯にひけらかしてゐる獨逸の宰相も、微の生えた數知れぬ書物を鼻先によら下げてゐる大學の教授も、恚うして自分の全生活を文字通りに「體現」してゐる程の大膽と皮肉とはまだ及びもつくまいと思はれる。もしか偶然として路の出合頭に、野良狗にでも吠付けられた日には、どうして那の様ではすた〜、驅出す事も出來無からうし、もしまた物に躓いて、前に限りでもせうものなら、那の柄で



は鍋も柄杓もめちやめちやに押し潰されて了うに相違ない。

乞食は柱に凭れて、こくり〜と居睡つてゐる……垢染むた、熟えた果物のやうに衝つてみたら膿汁でも出さうな指を組合せて、貰ひ溜の頭陀袋を大事さうに抱へ込むだま〜で……つい其の鼻先を朝鮮白菜が何かをしこたま積み揚げた荷車がかたびしと通りかゝらうと、または小煮氣な鳥打帽を一寸と横倒しに面のつるつるした外國人の見物客が、きやつ〜と氣輕に輕躁ぎながら過ぎて往かうと、其麼事にはお構ひなしに、こくりこくりと居睡つてゐる……

……産れ在所の節句を想ひ出してゐるといつたやうな容子でも無ければ、貰ひの大さかつた何がし寺の供養を夢みるといふ風でも無い。唯もう他愛も無く、死んだやうに寝込むだままで。

私はついぞ人間といふものをこれ程淺猿しいと思つた事も無ければ、またこれ程親しいものと思つた事も無い、立ち止つてまじ〜と其の寝顔を覗き込んでみた血の氣の薄い唇は、呼吸をする度に鞆のやうにびく〜と動いてゐる……あゝ此の女も生きて

ゐるのだ、(生命といふものは、何といふぢぢぢさい、荷厄介なものであらう)……世の中には厭に勿體振つて、人間の生命を何かまたと得難い珠玉のやうに崇めてゐるものがある。さうかと思ふと眞に詰らぬ木の端のやうな物に譬へて、唾も吐きかけない許りに蔑み切つてゐる者もある、人によると、人生を蔑むのは、取もなほさす之を崇めるので、應てまた第一歩を彼岸の高い處に進める所以であるとやうに解釋する者さへある、……それが何方にした處で、憐うして生れ落ちた以上は致し方も無い事だが、

世、其麼事を論じる餘裕も無く、唯生きる爲に生きてゐる人もある……  
生きる爲に生きる——何といふ露出な愛相つ氣の無い言草であらう、が、而し此の短い、そして強い事實に立脚した生涯で無ければ、よしそれが神のやうな生活であらうとも、私達には何處かに寂しい空虚があるやうに思へてならぬ。誰やらが言つた『超人』といつたやうなもの、境涯が、いつか私達にあり得るとしても、夫はこの短い、裸な生きる爲に生きるといふ事實に基いたものでなければなるまいと思ふ……

私は袂から二錠銅貨を一つ探り出して、密と氣づかぬやうにその膝に載せてやつ

た。もぞくさと身動く拍子に、貨はつるりと滑り落ちてかちりと鋪石に鳴つた。その音にきよとりと眼を覺した女乞食は、厚ぼつたい臉を妙にしよぼつかせて、其處に衝立つてゐる私の顔を見上げながら、格別に氣にも止めぬげに又こくりくと睡り懸らうとしたが、ふと脚下に轉つてゐる銅貨が見つかる、手を伸べて氣が進まぬさうに徐と拾ひ取つた。そして私に會釋するでも氣く、その儘うとくとまた睡りかける……まるで何處かの、女王が貢物か何かを尻目にかけてたともいつたやうな工合で……私は甚くそれが氣に入つて了つた。

今迄陰つてゐた秋末の日は、時雨雲が西北へ逸れ切つて了ふと、午過の、顔へるやうな弱い日暮を落して來た、それを横顔に浴びながら、何時までも睡りこけてゐる女乞食の氣樂さ……ふと氣がつくと、道往一人が二人立止つて、奇異さうに此方を見返つてゐる……私は忙しなさうに其處を離れて、すたくと途を南へ急いで往つた。

法起寺

大和の法起寺へ往つた折の事だつた。崩れかゝつた門を潜つて入ると、左手に水垢の浮いた小ぼけな水溜がある。見るとその水際に龜の子が、ひよつくり浮き出して、何かよくせきの用事でもあるらしく、のこのこと這ひ上つて來た。日和續きの照り晒しで、白く乾いた境内の砂地を、斜に右へ通りぬけやうとしてゐる。ふと私の脚音が聞えると、今更逃出す事も出来ないで、いきなり其處へ平伏つて、尖つた頭をすつぽりと甲羅の中に引込めてしまつた。

私は何氣なく通り過ぎやうとして、ふと小供の時の惡戯心が湧いて來た。で、杖を携つた右の手で、ひよいと龜の子の甲羅を撮みあげて、頭の向をもと來た方へ置き直したまゝ、何喰はぬ顔でそつと其處を退いてみた。  
私はあの推古式だとかいふ、名高い三重塔の、蟲の喰つた柱に凭れて、じつと龜の

子の容子を見つめてゐた。何だか恠う悪戯好きの神様が、運命の係蹄をかけて置いて、  
にこにこもので、密と私達の振舞を見てゐるといつたやうな氣持だ。

暖いばかりかする晝過で、空には雲雀がべちやくちやと喋舌つてゐる、先方から私  
の悪戯を見てゐたらしいので、如何かすると、平常の顔腕懸で、龜の子に裏切らぬも  
のでもないと思ふと、私は獨ではらはらした。が、龜の子はなかなかまだ首を出し  
うにもしない。死つたやうに凝と平伏した儘で……そのうち雲雀は喋舌り疲れて、滅  
らす口を叩きながら、塔の横手に下りて來た。龜の子はまだ首を出さない、私は徐々  
退屈で溜らなくなつた。

こつそり塔の内部を覗き込むで見ると、埃塗れの龜の裏に、如意輪觀音が睡ぼつた  
いやうな服付で燻りかへつてゐる、そのつい鼻先に馬鹿にしたやうに、銷の浮いたば  
ら錢が二つ三つ轉つてゐる、世の中には何の氣もつかずに、よく恠うした皮肉をする  
ものがある、佛様に費ひ途の無い鳥目をさしあげるのは、私達に魂を呉れたやうな  
もので、孰方にしても他困せだが、もしか私達にお賽錢の無い佛様と、靈魂の無い人

間と、二つ取りならどちらにすると、——こんな事を訊く人でもあつたら、孰方にし  
たものだらう——とたわいもない事を考へながら、ふいと後方を振りかへると、龜の  
子は梅干のやうな干からびた頭の尖を、ひよいと覗きかけてゐる……

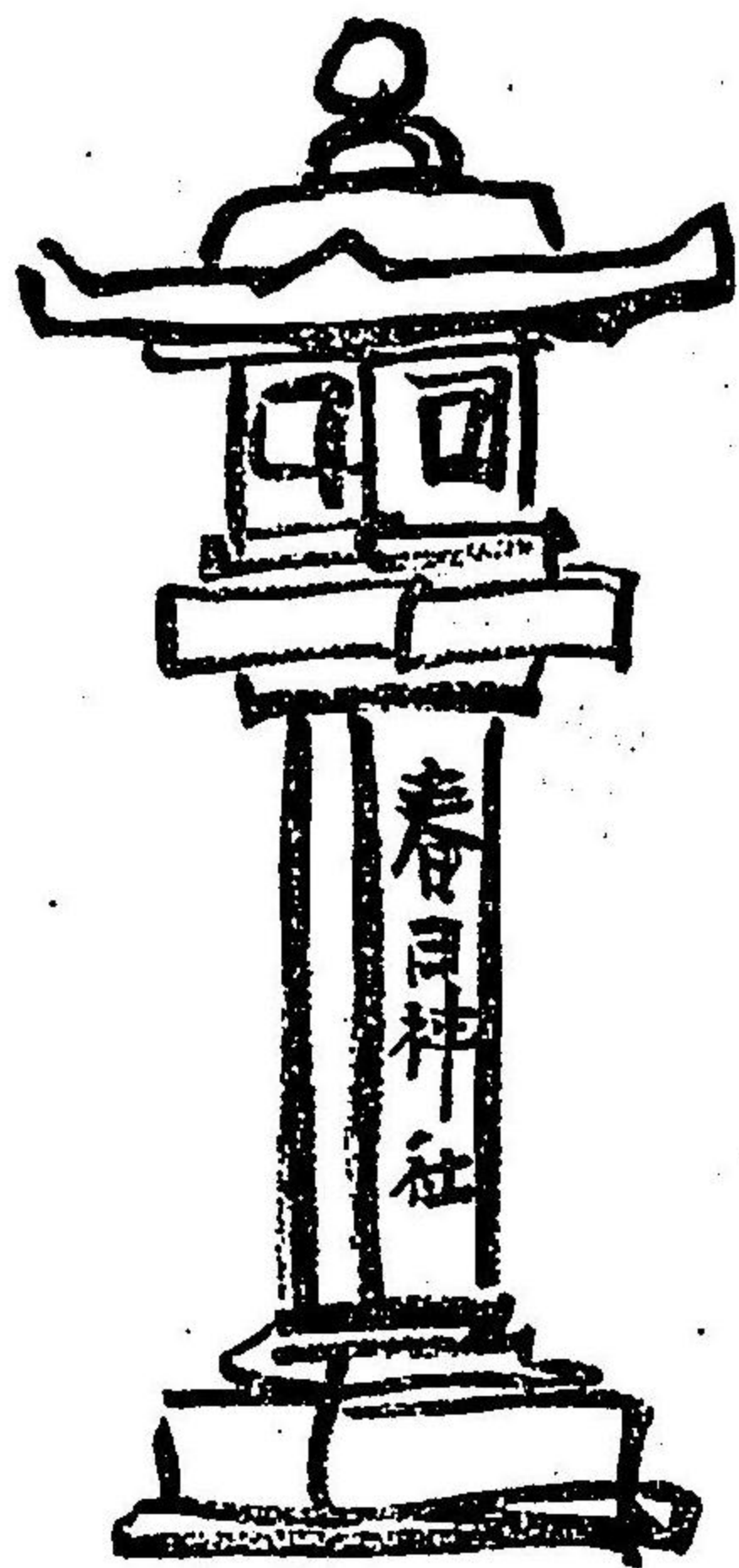
じつと見詰めてゐると、頭はよきによきと伸び上つて、おつかかな屹驚に附近を見  
廻してゐる。その不思議さうな顔付といつたら……あのニイチエを狂人にし、ベエト  
オベンを蟹にした神様も、大方恠うした物好で、吹出し相なお腹を抱へて、那の人達  
の恠々した靈魂を凝と見入られたに相違ない。

龜の子はやつと安心したやうに、のこのこと這ひ出して、またもとの水溜へおりて  
往つた。そして赤ちやけた水垢を潜つて、ひよいと濡れた頭を擽げて見せた。地面に  
上つて來たよくせきの用事は、悉皆既う片付いたかのやうに、厭に取済ましたもので  
——私はその馬鹿さ加減が甚く氣に入つて了つた。

神はナザレのエスを這廢目に遇はせて、そして自分の目論見通に往つたからと云つ  
て、可愛い子だと重寶がつてゐる。

鹿の脊の様な若草山は青くなり初めた。森は雪か霜の様な白い馬酔木の花盛も過ぎて、葉裏の白い櫟の老樹は芽が出てゐる。灰色がかつた緑に飾られてる春日の森は、杉の大木に絡んだ藤の若葉に近く花も咲くであらう。何に驚いてか蝸牛の様に頭を擡げてゐる鹿の群が俄に立つて、枯れた芒の中から築土の崩れを飛び越えていつてし

奈 良



### 旅の良奈

光 弘 澤 中

私は龜の子をつかまへて、息子だと言つた記憶はない——どうして神様より餘程罪が軽い。



まふと、氣早の商人がカンコホリ〜と呼んでゐるのが遠くに聞える。  
 春日の社は紅がかつた丹の襦めたのがよい色になつてゐる。而して白い壁、青い窓、赤い柱の廻廊、其下の小溝を水屋川の清水が流れて、軒には藤の若葉が被さつてゐる。花が咲くなら垂れた枝に咲いた一房は其清水に浸るであらう。今樂の音がやんで、金燈籠の一つ二つが風に少し動いて花が散つてくる。白い衣に赤い袴の巫子が二人花かんざしと銀のビラ〜を動かしてやつてくる。それが青い窓の格子越に覗いてゐるのが見えてゐる。

鹿の角細工はどうでござりやすと呼ばはつてゐる店頭を通り過ぎると、折しも藤棚を吹いて行く風が一しきり烈しく森の古葉を揺つて、ばらばらと店頭に木の葉を吹き下ろすのを、鹿の群がまばゆさ



名所案内

うに見上げてゐる。

良辨僧正の作だといふ梵天の像は、三月堂の格子越に薄暗い奥にぼんやり見えてゐるのが拜まれる。二月堂は畫の位置をなしてゐる。舞臺に上つて擬寶珠のある欄干に倚つて、生駒から西の京、大きな大佛の屋根を松の上に観るのが愉快である。

大佛の鐘樓は大鷲が兩翼を伸ばした様な軒の反りが氣に入つた。其太い黒すんだ柱の中に、一丈四尺の梵鐘を見上げるのも又愉快である。

大佛殿は今修繕中で、琥珀色になつた白壁と淡紅を帯びた丹の柱とが佳い色になつてゐる堂の正面を僅に見せて、其下に參詣の群衆が豆粒ほどになつて押し寄せてゐる。

南大門の二王は夏の空に雲の峯でも仰いだ様な感じで見上げる。  
 興福寺の塔は殊に大きくてよい氣持だ。生駒から三條通が絲の様になつても、此塔は見えない事が無いだらうと思はれる。塔の軒には雀が數千ちゆうちゆういつて宛ら山おろしに木の葉がばらばら飛で散るやうに舞つてゐる。丹が褪めて黒くなつた東金堂も大きい方だ。花の松といふのも大きい、松は四方に枝を張つて、やはり見上げる様

に高い、それが丁度塔を真似てをるやうで今三階目迄は届いてゐる。  
 三層の塔は南圓堂の後の低い所にある。北圓堂と共に見て行く人もない。軒は朽ち、  
 九輪は風に危い程ぐらぐらと動いてゐるのが見える白毫寺の多寶塔も亦衰はれた運命  
 を共にしてゐる。其道は盡になるほど苔と草とに埋もれ、堂守る人がないので、さび  
 れた跡が淋しい程であつた。

猿澤の池は興福寺の塔があるので風景がよく  
 なつてゐる。柳は瓔珞のやうに垂れ、塔は倒に  
 其影を映してゐる。鯉に餌をやる人、人に追は  
 るる鹿、赤い日傘と京や奈良で畫になる裳袴の  
 赤、夕日に近い強烈な日は段々塔の屋根裏に廻  
 つてくると、九輪が今に金色に輝くのであらう  
 と思はれる。

飛火野の跡といふ旅宿は、夏の初め郭公の聲



が聞かれるといふ。黒い杉と木立の根が地盤を飾つてゐる春日の森を前に控へて、野  
 に近く、大佛の薨を後にして若草山が見えてゐる。茲に宿とつた夕は、こうこうと鹿  
 を呼ぶ水色の衣を着た鹿飼の聲と、鹿を呼び集める喇叭の聲とが聞え。大佛の鐘が續  
 いて鳴り、見物の群がぞろぞろと歸つて行く足音に日が暮れる。





西の京

鼠色の空に、真直な道はまだ空よりも明るい白茶色で、両側の麥畑は風に戦いでる。左に淡藍い金剛山を見ながら佐保川を渡り、而して土塚の崩れ農家の粗壁とれも

面白いと思つた村にはいつた。ほどなく筋屏で取圍んだ寺が見えた、それが法華寺である。自分は十一面觀世音を拜したいといふので、今年も又裏の戸口から本堂の拜觀を頼んで見た。女の聲で今日はお断り申ますと障子越である。東京から参つたものですがと繰返すと、暫くして本堂にお廻りなさいといふ聲がする。箒目の付いた道を飛石づたひに本堂の前にまはる。丹が黒くはげた本堂の格子から覗いてみると、お龜が見え、天蓋が下つてゐて、直ぐ眼の前に御守犬といふ白い犬張子が黒の三寶に乗つて、お賽銭がちらばつてゐる。

去年は若い丸顔の尼さんが案内をして呉れて、お龜の扉を開けて『ようお詣りになりました、どうぞお傍お近う』と低い聲の優しい人であつたが、と思つて居ると、やはり二十八九ほどな尼さんが黒の腰衣を着けて戸を開けて出て来た。どちらからお越しですか、お名刺を、と云つて、蒔繪の文箱から鍵を出してお龜のお扉を開けた。而してやはり同じやうにお傍へと云はれる。光明皇后のお姿が池に映つたのを其儘お刻ませになつたので、此所の觀音は光背が、蓮の葉になつてゐる。去年拜んだ時から

其所を畫にしたいと思つてゐるので、今度一年目で御影を拜むのが恰も其時よい畫題を授かつてゐた様な氣がした。そこで尼さんの後からお籠の中を見上げる。お丈は低い方であるが、お眼は長くて、白い中に瞳が黒いのと、引き締つたお口は珊瑚の色にて赤く、それで生けるお人の様に拜まれる。御堂を出て御姿の映つたといふ池の跡が僅に水草が浮んで小さなものになつて残つてをるのを見た。昔は十八町も廊下が續いて七堂伽藍が此邊に揃つてあつたといふのを想ひ合せて、霞んでゐる春日の方を見ながら其の傳説の構圖を描いて見る。而して歩を秋後寺へ轉じた。

大元師明王の像が開扉料を拂つて祈禱の後に拜まれる。お籠の暗い中に眞黒になつた大明王の像は、口を開いて兩眼を睜つて手に劔を持ち、五體に十何疋と云ふ蛇を巻きつけてござるのが拜まれる。今法華寺の門を出て来た途中の想像は此恐ろしい大明王の形にかき消されてしまつた。

雨は烈しく降り初める。

西大寺は塔の礎を残して再建のものが多いの、案内の坊主が不愉快な奴であつた。

御堂は雨戸をたてきつたまままで濕つばい冷たい板の上を曳き廻はされたばかりであつた。雨に若葉の緑が目覺むるばかり美しいのが、隅の戸口から金色の佛體に反射してゐるのはよいものである。而して何處となく製茶の薫がして來るのもよい氣持であつた。

大佛殿の雛形だといふ喜光寺の金堂が、田圃の中にボツンと一つ残つてゐるのを左に見て、垂仁御陵の濠を廻つて雨の中を人車が走る。薬師寺の塔が見え、左に唐招提寺の瓦棟が見える、鷗尾が見える。

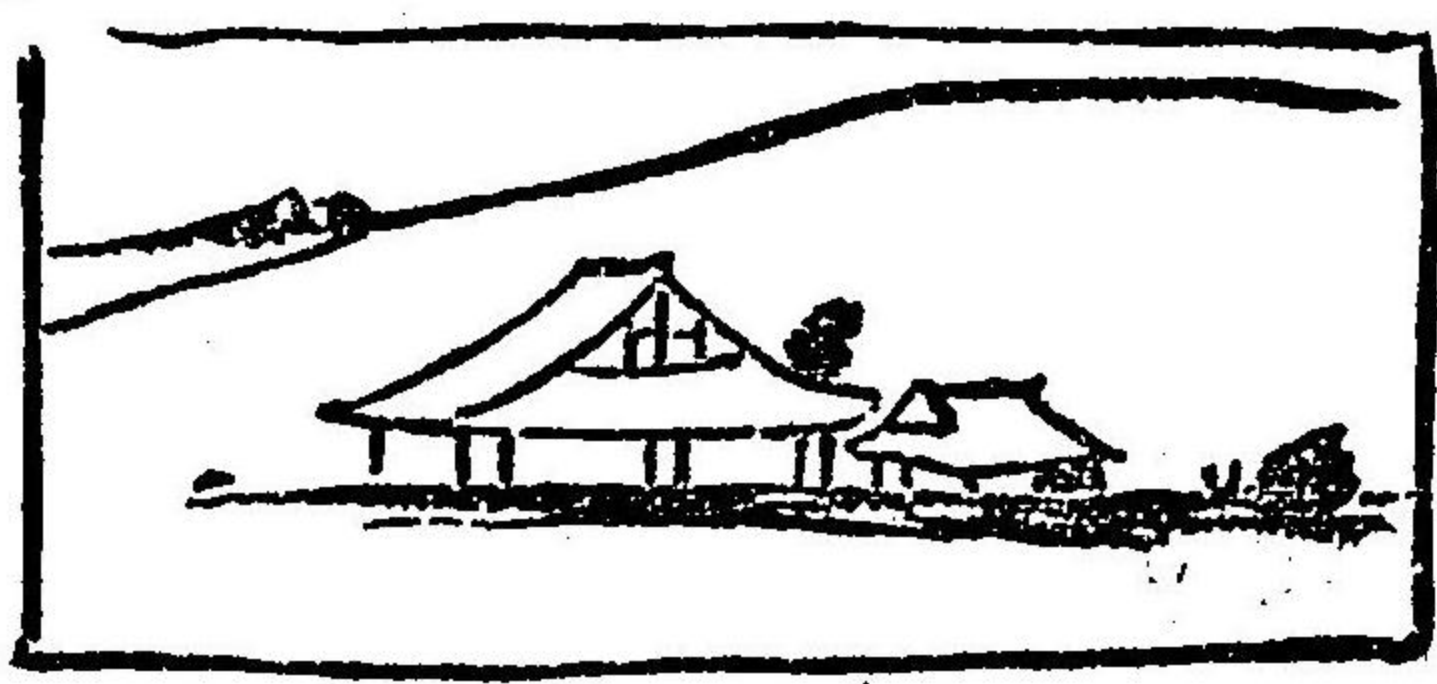
唐招提寺の金堂は莊嚴なもので、太い圓い大い柱は二間おき位に八本許見上げる様な高い堂の土壇に立つて案内僧を待つて居る。雨の雫は瀧の様に横手の禮堂や鼓樓の軒から落ちて居る。此建築は畫に描いて見たいと思ふ程に、形ばかりか色までがよい古びが着いてゐる。案内僧がカランコロオンと駒下駄の響をさして裡からギイツと扉を開けた。而して大い佛像の前に立つて講釋を初める。是が乾漆といふんだすな、あ、籠の心で十三枚の布を張つて抹香と漆とで塗るんだ、胎内に過去未來の二千佛と



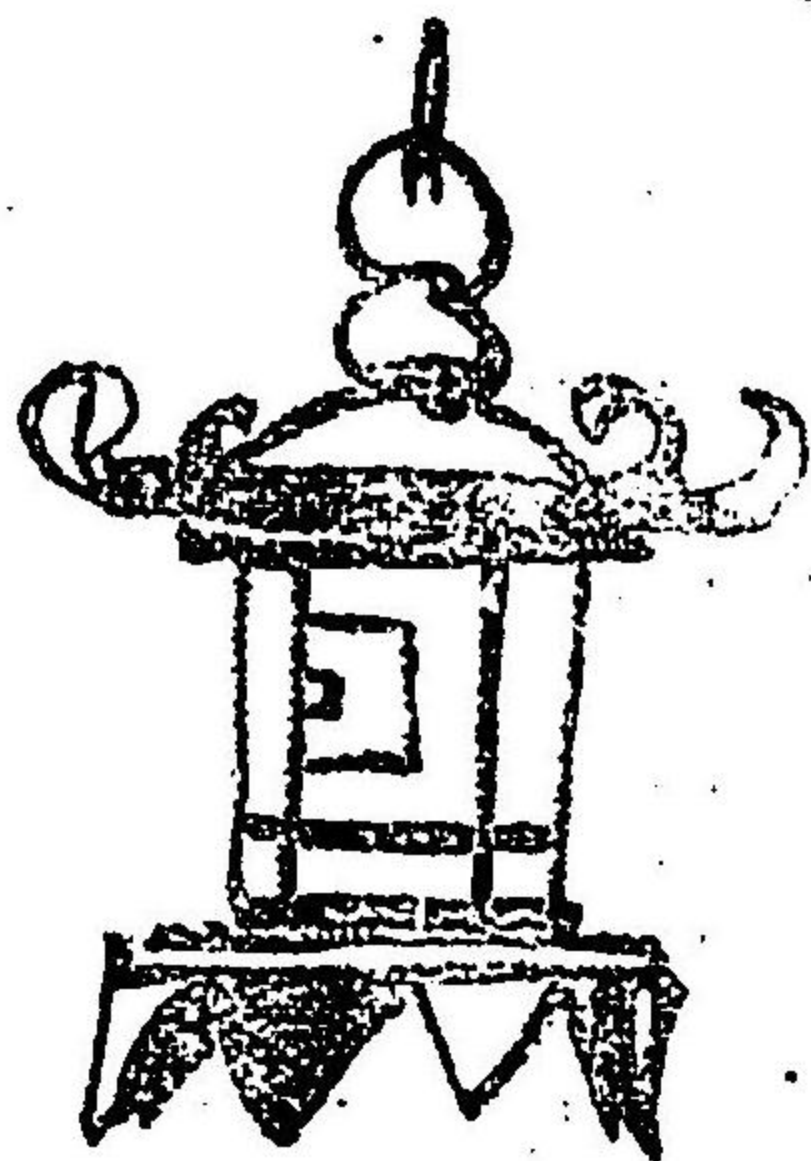
光背に千佛とが付いて御座るのだ、と教へて呉れる。それから天井の中に模様もようの剣落けんらくした痕を指して、昔は極彩色ごくさいしきだったのが元祿年間げんろくねんかんに丹色にいろに塗り替へたのだと云ふのを聞いて、自分は唯ぼんやりとして堂を見廻みまわはして外に出る。支輪しりんの間や扉とびらに彩色さいしきの褪めた痕のあるのを見る。而して宏莊こうじょうな金堂こんだうの土壇どだんに立つのが何となく愉快えきぐわいで、此所こゝでは佛像ぶつぞうを拜まがんだよりも建築けんちくの方に氣を奪うばはれてしまつた。

茲こゝから四丁しちやうほど又雨またあめの中なかを行くと、去年こゝれねん菖蒲しょうぶが咲ひいて居た溝みぞの小窓こまどから、手拭てふきを被かつた赤い櫻あかの娘むすめが首くびを出だして、茶ちやの焙爐はいろの匂におひが通とおつて居た邊あたりで樂師がくし寺てらの塔たつたが見えた。而して書まにある土ど塀べいの間まを歩あむ。惜あはしい事ことには白しろい道みちが緒あひなつて居る。

案内あんないの爺ぢいさんは佛體ぶつたいを手てで一つカンと叩たたいて『本尊ほんぞんは樂師がくし如来にょらい、兩脇りやうわきが日光にちくわう様さま月光げいこう様さま、みんな金銅きんどうだす、指ゆび一本いっぺん下くださつても結構けつこうなもんや、此通このとより磨みがくと金きんが光ひかります』といつて黒光くろひかりり



になつてゐる佛體ぶつたいの裾すその方ほうを擦こつて見せる。而して臺座たいざの模様もようの精巧せいこうなものも自慢こゝろしてゐる。それから東禪院とうぜんいん堂だうへ廻まわつて立派りっぱな彩色さいしきのあるお籠かごをガチャンガチャンといはして、お扉とびらを開ひらけ帳とじを上げて、『金きんの質しつが一番いっぺんいい間浮まうき檀金だんこんといふんだす、日がくだらばつたんで解わかり悪わるうございます』と姿勢しせいのよい真直まなぢに立つた觀音くわんおんを拜まがませる。直立ちくりつした聖觀音せいくわんおんを拜まがんだ眼まなこで直ただぐ又高またたかい三層さんじやうの塔たつたの下したに立つ反さかりかへる様ような伸のびび々びびした氣持きもちで九輪くわんりんを見上みあげる。九輪くわんりんは少し勝かち過すぎる位くらいに水烟みづえんも立派りっぱに大きおほくてよい恰好きやうがうである。



塔たつたは大和やまとの天地てんちを飾かつてゐるのだ。それが何處どこでも白毫びやくごうの珠たまの様ように眼まなこに着つく。例たとへば青あおい山やまが巖いわとつた裾すそにも、黄きいろい榮圃えいぼが續ついた末すえにも、白しろいうねうねした道みちが霞かすみんだ奥おくにも、塔たつたの高たかいのが眼まなこに着つくのである。田圃たぼの中なかに法起ほふき寺てら法輪ふわん寺てらの塔たつたを見みた時ときも、男女おとこ二峰ふたみねが並なび立つて二上山ふたかみの裾すそに當麻たえまの兩塔りやうたつたを見みた時ときも、自分じぶんは歴史れきしを除のいて見みた眼まなこからでも

大和は壽になる名所が多いと思つた。千年も前の建築を観て、山は生駒から信貴山、二上から葛城金剛、三輪から高圓春日と塔を取巻いて居る茶色や青い山を順に數へて見て、其下に立つて居るのが愉快である。而して塔から塔へと春の道を歩んで行くのが實に楽しい旅であると思つた。

寺内を出て、幾度か振り返つて塔を見る。塔は遠ざかるほど益々いい形になつてくる。空の部分に見えてる三つほどの屋根の輪廓が、段々淡くなつて其影を見失ふと、今度は興福寺の大きい塔が春日の裾に見え初める。而して自分は其方に歩んで行く。木辻近くなる頃は町に灯が點いてしまつた。黒く繁つた高い春日も、脇士のやうな高圓若草の二山も、いつか闇にかき消されてしまつた。

初瀬

麥畑が若い海の様の中に、三方に浮かんでゐる島のやうな大和の三山、松が繁つた一番高いのが神武の御陵、假頭笠を伏せた様で木が茂つた圓いのが耳無山、ひらたく長いのが天香具山、飛鳥川は其間を流れて行く。大和は丁度潮干の時に出てくる磯の様に、小山の多い丘の多い所である。而して其裾を白い道がうねうねと廻つてゐる所である。

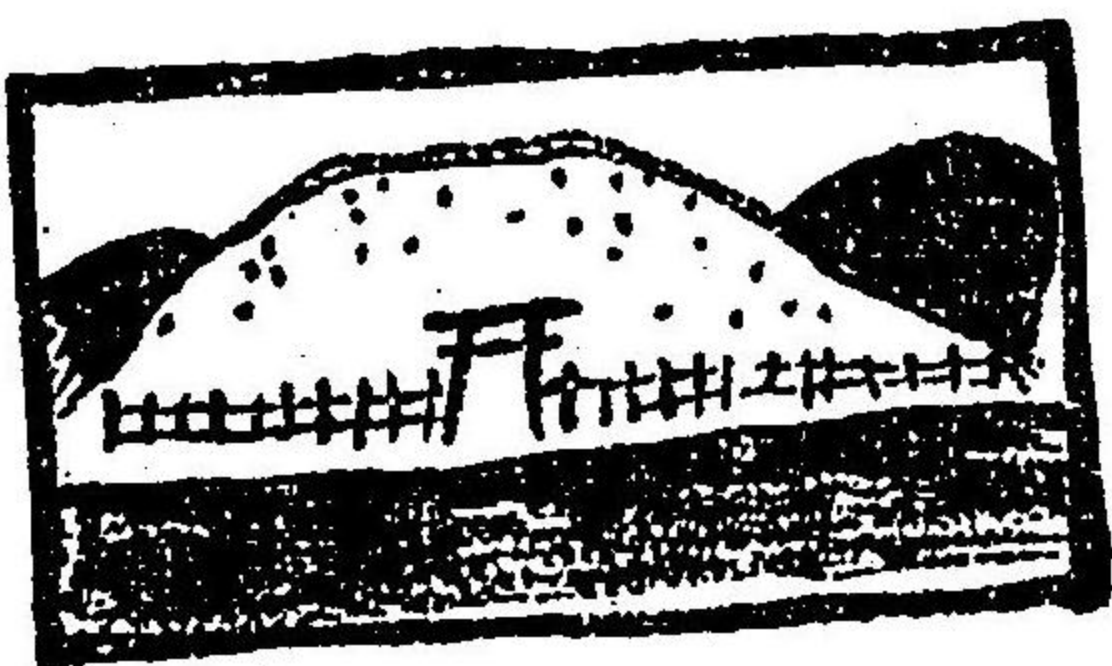
櫻井の停車場には初瀬詣の客が可なりある。初瀬の町は川が後を流れて、旅籠屋が並んで、其兩側の山には寺がいくつとなく段々になつて、其奥に山門から廻廊、其上の茂つた山の中程に舞臺から御堂が見えてゐる。長谷寺は牡丹の満開である。舞臺に上る百八間の坂になつた廻廊、其兩側には二千餘株の牡丹が咲いてゐる。

観音様のおみあしをお拜みなさいと、燈明のついでに堂の廊下から、二丈六尺の十  
 一面観音を覗かせる。舞臺に出て下の町から宇陀の坊主山を前に見る。御堂の燈籠か  
 ら舞臺のさまが、京の清水に似て塔の無いのが遺憾であるばかりだ。此所は吉野から  
 多武峰を越えて来る行者や高野詣の白衣も見かける。舞臺の欄干に倚つて眠て居ると、  
 鉦の音がして御詠歌を唱ひながら廻廊を上つて来る連中もある。日が暮れると、御堂  
 に灯が点く、折れ曲つた廻廊の天井に幾つとなく灯が点く、数多き金燈籠のにも灯が  
 点く、兩側の花壇にも亦灯が点く、而して下の町にも、六十箇寺の内にも灯が点くの  
 が見える。長谷はさすがに人の来る名所であると思つたのである。  
 塔は室生の奥にも多武峰にもある。共に柏皮葺で、小ぶりの華奢な塔である。而し  
 て長谷に無いのが返す返すも遺憾であると思つた。

吉野

汽車は菜の花の香がしてゐる軌道を走る。右に薬師寺の塔から法起寺法輪寺の塔、  
 法隆寺の塔に金堂の臺も見え、遠く松尾寺の塔も見られる。王寺で紀州行の汽車に乗  
 り替へると、直ぐ右が二上山、其裾に當麻寺の東西兩塔が小さく並  
 んで見え、續いて葛城金剛の二山が聳えてゐる。左は見覺えのあ  
 る畝傍の御陵。

汽車は壺坂を過ぎて吉野口に着いた。停車場の前には犬に曳か  
 せて走る車の犬がきやん／＼鳴いてゐる。自分は馬車に乗つた。  
 黒い箱の荷馬車の様なのに白い日除けの飾りけのないのが懸つて  
 ゐる。埃の立つ道をがたんがたんといはして走る。犬に曳かせた  
 車が前後になつて走つて行く。柳があつて茶屋があつて、道が三



筋細い三叉になつた坂路を小さな人馬が上つて行く。これは車坂峠。峠を越えんと、吉野川が見え、鐵橋が架つて、下市の街だらうと思はれるのが見える。

柳の渡は今は假橋になつてゐる。吉野川の水が澄んで鮎がゐるかと思はれる程である。立場の茶屋には鴛籠があつて花が散らばつてゐる。川口には筏が下りてくる。川向ふの藁屋や瓦屋根の上には坂があつて、花見歸の赤い裳裾が幾人とも下りてくる。其奥に花の吉野が見えてゐる。

櫻は坂路の兩側から谿へかけて何町となく植ゑられてゐる。今年には雪が續いたのと、鶯の大群が木の芽を喰ひに来たのとで、思つたより花が少い。もしも一目千本といふ所から花の盛に眺めたなら葛城山脈から生駒へかけて青い山を遠見にして、眼下は一面の花の雲で谿を埋めて、吉野川が其木の間に光つて見えるであらうと思はれる。けれども花は乏しい。花見の人は益々多く、年々俗になつて行く吉野の奥に、三味線の音騒々しき茶見世が殖え、藏王堂の境内に今めかしいハイカラ露店が並ぶ様になつて、如意輪堂も吉水神社も竹林院も繪端書に捺す爲めのスタンプが一枚何錢と定めら

れてゐる様になつてしまつた。

山に寝て明くれば梢を亘る風の音、雨戸を繰れば肌寒い風、頭を擡げる枕は春も冷々と感じる。朝日を浴びた山、谿間の村から聞えてくる鶏の聲、鶯は幾度となく啼いてゐる。

如意輪堂で拜んだ後醍醐帝のお木像は、お肩のいかつたのが尊かつたのに、崩御の當時を想ひうかべて、御陵に詣でた。

吉水神社で玉座の跡といふのを拜し、役行者が足駄を穿いて小鬼が跪いてゐる木像を見、吉野神宮では静御前が法樂の舞に冠つた鳥兜といふのを手に觸れて見た。

西行庵といふのが奥の千本といふので、都人士も行くのが稀である。枯れた芒と老樹の櫻とに囲まれた庵室の跡は寂としてゐる。杉の谿では伐木の音が聞え、後の山では鶯も鳴いてゐる。長閑な春の光は花に幸なき旅人を照して、老樹の蕾は今日明日には覺束ない。今の吉野は夕暮の一時、暮靄が山を包んで、落花深い所に古を忍ぶ位なものである。

吉野から大瀧へ下る。

大瀧といふ宿は吉野川に沿うた熊野街道のうちである。旅宿の二階座敷から目の下に白く泡立つて岩に砕けてゐる大瀧といふのが見える。其所は筏士が一番難所だといふのである。岸には積み上げた木材が見え、ごろんごろんと山からころがす音も聞える。川の音に河鹿らしい聲も交じつて聞える。川に沿うた街道に往來の牛馬も見える。夏の旅の様に手摺に手を掛けて横になる。夜になつて宿帳を繰つたが東京の人としては頓とない。自分は今熊野街道に來て居るのだ。義經に太塔宮、昔は鎧武者が落ちていたのだ。筏を六里上から流してくるのだと聞いて木曾の旅を思ひ出す。自分は是でも吉野の奥に宿を取つて花に日を暮してゐるのだ。此邊から散つた花が筏に積もつて川下に行くのであらうと思つて見る。而して汽車や軍艦の想像も付かない子供までが、東郷大將を強いといつては義經を忘れて行くやうになるだらうと思つても見たのであつた。

五社峠といふのを越えて下市の方へ行く道は吉野川に沿うて行くのである。峠の途

中から振り返ると蜻蛉の池が僅に見えて、山を焼く畑と名を知らぬ瀧も見えてゐる。宮瀧までは下り坂で杉の木の間から筏がつかつて下つて行くのが見え、途には吉野がへりの娘などが赤い腰巻の揃ひで、名物の花籠に葛の菓子箱を提げてくるのに出會ふ。

宮瀧といふのは川幅の狭い上に板橋が架つた碧く渦巻いた急流で、柴橋ともいふのである。筏士が此所を下るのが奇観である。これから平地で二十町ほど行つた所が名高い妹山背山といふ名所で、川を距てた西岸の小山が、一つは繁つた、一つは禿げた、餘り畫にならぬまるい山である。上市の川べりで櫻の渡から見るのがまだしも位置をなして居るばかりだ。唯吉野川の明るい清い流が氣持よいのを探るので、吉野は山よりも此川べりがよいと思つた。而して自分は山に登つて此川上から下つて來たのだと思へば、吉野見物もまづ十分であつた。

旅の歌

病む眼いえて奈良の旅寝の若葉宿風に枕のこころよき朝  
 山かげに鹿角の小櫛雛人形召せと人呼ぶ奈良少女かな  
 思ふ子に春日の巫女の衣させて奈良に物賣る繪師とならばや  
 木がくれに小き丹塗の宮見えて白藤咲きぬ春日野の森  
 たちこむる山の朝霞大湯屋の薨も霜の色のみにして  
 大佛の堂の普請の槌の音霜にひびける奈良の朝かな  
 京大和塔の雫に濡れてこし繪の旅路をばしのよ春雨  
 み社のつめたき雨に額づきて白きもあはれ石を踏む足  
 山寺の尼が碾く茶のうすいろに鬘金の櫻散ればさびしも  
 少女等がかみの紙捻をやどり木にかけたるあとの花吹雪かな

立寄りて巫女の聲さく神樂殿白壁青き若葉かげかな  
 佛彫る春の假寝の夢さめて鹿に餌をやる奈良の旅びと  
 櫻ちる湯槽の中に長谷寺の鐘の音さく春の夕ぐれ









賀名生皇居趾  
信賢山舞臺  
生駒聖天堂  
生駒山腹

芳 野

朱の都

法隆寺  
藥師寺  
唐招提寺  
法華寺  
佐保村  
三月堂

同  
同  
寫真版  
木版

以上中澤弘光

原色版

以上淺井忠

高安月郊

一四七〇二六

大 和

吉野  
初瀬  
奈真  
法隆寺  
塔の峯

冬の春日野  
大佛の顔  
神子  
奈良の道具屋  
當麻  
長谷  
三輪  
畷  
芳野

與謝野晶子

一三三三三三三三三三

一三三三三三三三三三

目 次 終

西の京  
吉野  
旅の歌

二八  
三三  
三三

當麻寺

西の京

秋篠寺  
旋風

西大寺の伎藝天女

喜光寺

唐招提寺

唐招提寺木曳引

焙爐の香

吉祥天女

奈良の女乞食

法起寺

奈良の旅

奈良

薄田泣菫

三

中澤弘光

二三

五  
七  
七  
八  
九  
九  
一〇  
一〇  
一〇  
一〇  
一〇

木版印刷  
琥珀版  
原色版  
寫真版  
活版  
表紙印刷  
製本

伊上骨  
西村熊吉  
中野米藏  
大江太  
同  
三生會  
五彩閣  
植木瀧藏

明治四十四年二月廿五日印刷  
明治四十四年三月二日發行

著作權  
所有

金 次 郎

發行人兼

東京市麹町區平河町五丁目五番地

金 尾 種 次 郎

印刷者

東京市麹町區平河町一丁目四番地

中 村 彌 三 郎

印刷所

東京市麹町區平河町一丁目四番地

三 生 舍

發 兌 元

東京市麹町區平河町五丁目五番地

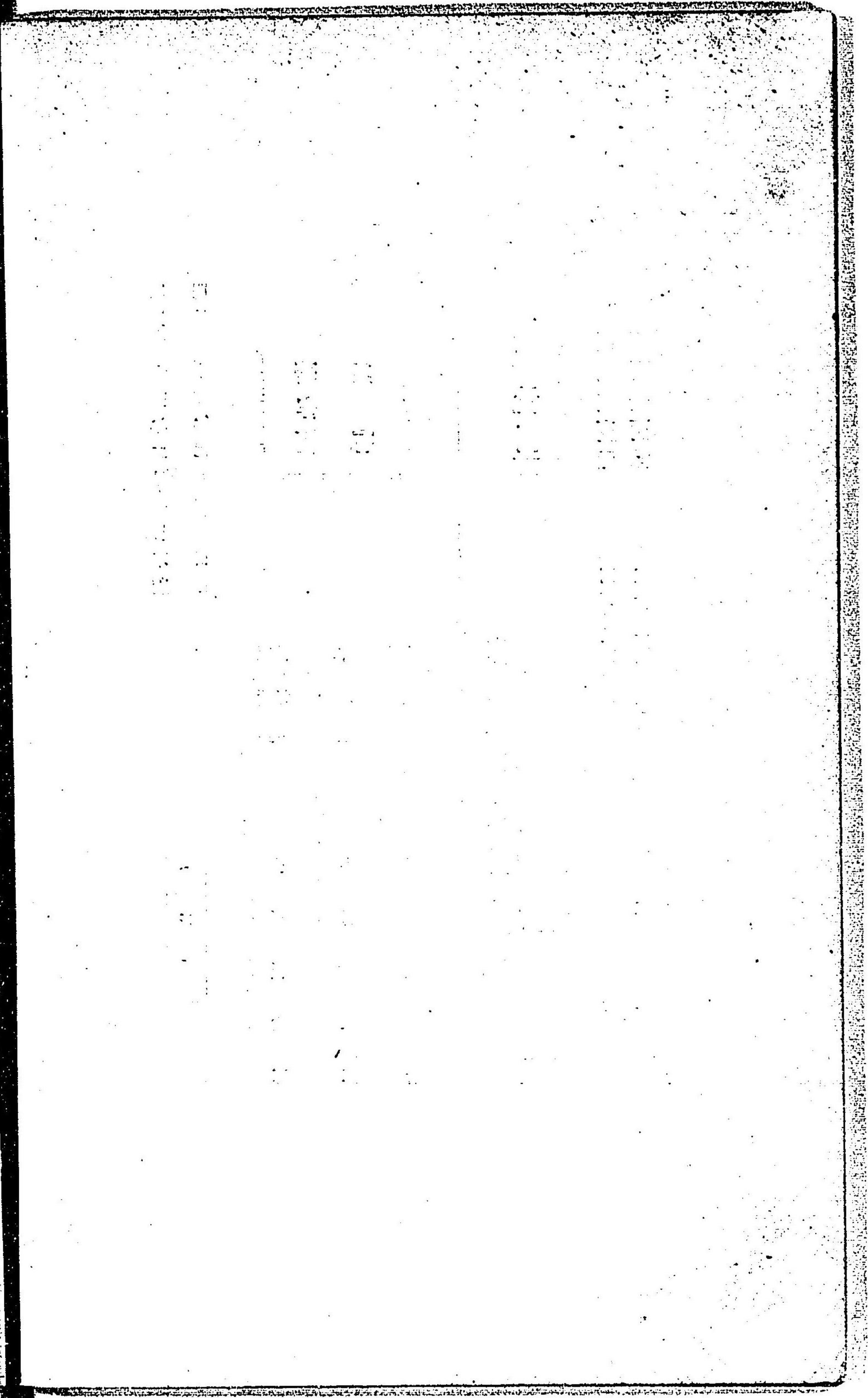
金 尾 文 淵 堂

(振替 東京三八一七番)

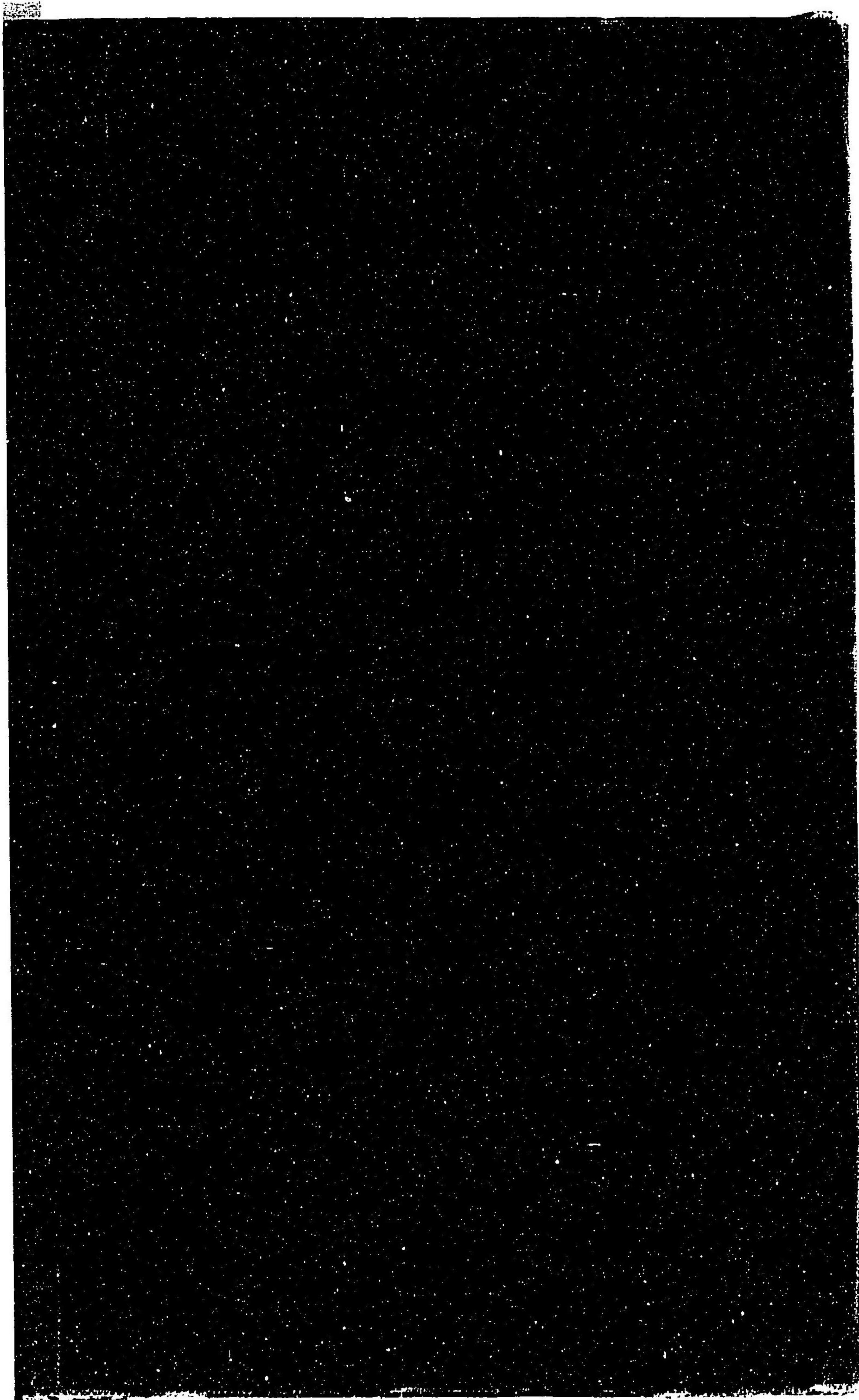
關東發賣元  
關西發賣元

東京市日本橋區上根町  
大阪市東區北波邊町

千代田書房  
杉本梁江堂



330
27



330

27



